

病院存続 嵐の末の民営化

地域医療の最前線で②

現場へ！

った昼食の「検食」を終え、つ
ぶやいた。

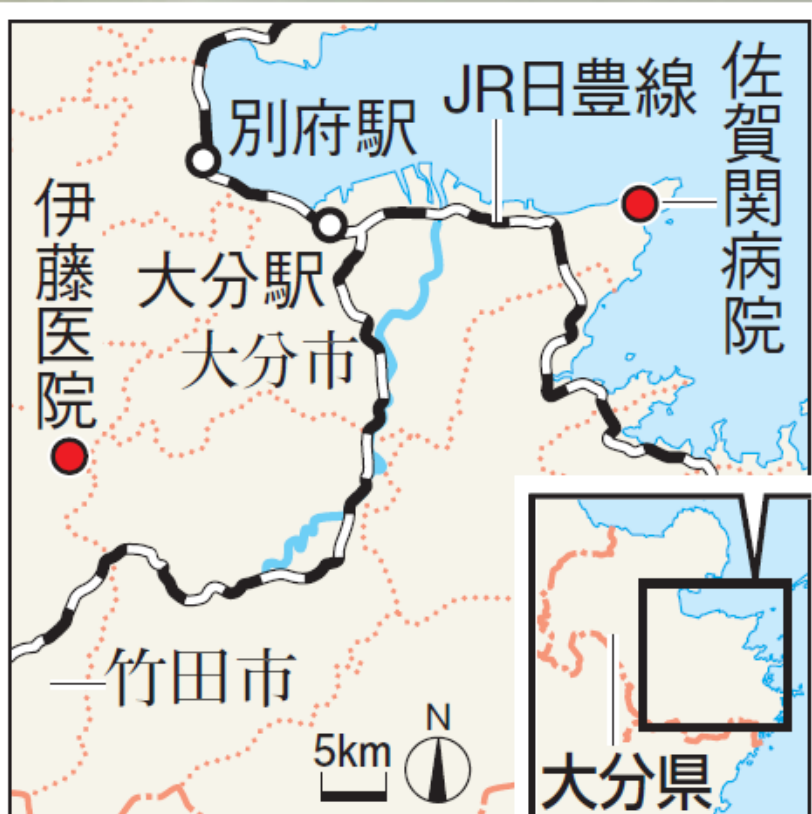
おかしみがある人だ。
「どうしても全部食べちゃ
う。残す勇気がない」。社会医
療法人関愛会の会長、長松宜哉
(67)は、診療所の調理室がつく

ラムネ温泉で知られる長湯温
泉郷(大分県竹田市)のへき地
診療所・伊藤医院。入院ベッ
ドがあり、配食事業も手がけ、地
域で頼りにされてきた。だが、
院長が病に倒れ、同じ竹田出身
の長松に「応援」依頼が来た。
自分の病院とかけもちで、多

い時には週4日、長松は大分市
内の自宅から車で約1時間かけ
て通勤、診察にあたってきた。
「地域包括ケアに熱心に取り
組む法人が大分にある」。旧知
の取材先である二木立・日本福
祉大名誉教授からそう紹介さ
れ、私が1年間、「研修生」と
して身を寄せた関愛会は、長松
が18年前に設立した。存亡の危
機にあった町立病院を受け継い
でスタートした法人は現在、三
つの病院や介護施設など30を超

える事業所、職員約700人を
抱えるまでに成長している。
1979年に自治医科大学を
卒業した長松が、大分県東端
の半島にある町立佐賀関病院
(130床)の副院長に就任し
たのは90年のことだ。関アジ関
サバのブランドで知られ、国内
屈指の銅の精錬所も立地する佐
賀関町だが、高齢化と人口減少
が進み、2002年に大分市と
の合併協議が本格化した。

04年4月、町議会は関愛会へ
の譲渡案を否決。大分市との合
併自体が頓挫しかねない事態に
陥ったが、翌5月の臨時議会で
一転可決された。「本当に奇跡
だった」と長松は振り返る。



診療所で検食する長松宜哉医師＝大分県竹田市

ケアマネの柴田あゆみさん＝大分市



関愛会の拠点である佐賀関病院。入り江の向こうには銅の精錬工場がある＝大分市

大分市側は、赤字体質の町立
病院を引き受けないとの条件を
提示、最終的に町は民営化の方
針を決める。長松ら勤務医4人
が結成した「医師団」(後の関
愛会)を受け皿に譲渡すること
で決着したように見えたが、町
議会の反対派から猛烈な巻き返
しにあう。背景には、別の法人
も受け皿に手を挙げており、町
が以前計画した新病院の建設費
23億円をそのまま引き継ぐと約
束していたことがあった。長松
らは、その計画の半額以下での
新築を考えていた。

「良い意味で、お医者さんら
しくない。私たち介護の人間と
の距離が近い。だから患者さん
について話をした後に関き忘れ
たことがあっても、ちゅうちょ
なく診察室に聞きに戻る」
介護職が安心して話しかけら
れる。この資質は、地域医療で
関愛会が急速に地歩を固めたこ
とと深く関係する。「医療と介
護の境界はなくなってくる。地
域に出て介護職や住民と話がで
きないと困るんです」。長松が
求める医師像だ。
敬称略
(浜田陽太郎)